

道徳の学びが始まるよ

— 学びの見通しと振り返り、発問構成の工夫

新版教科書では、学びを見通すこと、振り返ること、発問構成について、より丁寧な紙面を作りました。その工夫と授業での生かし方について、編集委員の杉中康平先生と中里純子先生にお話いただきました。



杉中康平 ●すぎなか こうへい
四天王寺大学教授(道徳教育学、教育実践学)
「楽しく豊かな道徳科の授業をつくる」(編著/ミネルヴァ書房)など著書多数。光村図書小・中学校「道徳」教科書編集委員。



中里純子 ●なかざと じゅんこ
神奈川県横浜市立笠岡小学校校長
横浜市内の公立小学校勤務の後、横浜市教育委員会等を経て、現職。光村図書小学校「道徳」教科書編集委員。

「道徳が始まるよ」

— 継続的な学びと道徳科の学び方

杉中 教科書を開くと、「道徳が始まるよ」*1という楽しそうなページが、まず目に飛び込んできます。このページは、2年生以上の第1教材として設定されていて、《道徳で学ぶ〇〇のとびら》*2、《みんなで気持ちよく話し合うためのこつ》、《道徳みちあんない》*3の3つの見開きページから成ります(下図版参照)。ここで、1年間の道徳科での学びを概観することができます。

中里 新年度を迎えて新しい教室に入ると、子どもは、不安や緊張を感じるでしょう。しかし、新しいことに対する期待も抱いています。そんな子どもたちに、1年間の道徳科の

学習にワクワク感をもたせるのは大事なことです。道徳が始まるよ」は、とてもよい試みだと思います。特に、《道徳みちあんない》のページは、双六のよう^{すごろく}で楽しいですね。例えば、教科書に登場するキャラクターのきりりん、ころろん、もやもやんをコマにして進め、止まったところの教材を開いて、絵を見せたり、話を想像させたりすると、学習への期待を高めることもできます。

杉中 《道徳で学ぶ〇〇のとびら》や《道徳みちあんない》のページは、そんなワクワク感を高めるとともに、道徳科が「継続的な学び」である意識させる役割もあります。私は、道徳が、道徳「科」となったとき、最も大きな変化は、「継続的な学び」の視点ももてるようになったことだと考えました。1時間1時間が切れているのではなく、年間35時間(1年生は34時間)の大きな流れの中で一つ一つの教材が繋がっている。このことを、これらのページを使って、子どもたちに伝えてもらいたいですね。

中里 「継続的な学び」という視点は大切ですね。それから、道徳科では、

物事を多面的・多角的に考えるためにも、話し合う活動が欠かせません。「道徳が始まるよ」の中の《みんなで気持ちよく話し合うためのこつ》というページでは、まずは相手を受け止める、傾聴を大切にするなど、学年に応じた「こつ」が示されています。

杉中 「こつ」を確認した後、すぐに「やってみよう」というコーナーが用意されています。実際に対話や話し合いがしやすい、学年に応じた課題を設定しています。例えば、3年生は、「ありがとう。」と言いたくなるときについて話し合います。第2教材以降に先駆けて、対話のトレーニングをすることができます。

中里 話し合いや対話の「こつ」は当然、一朝一夕で身につくものではありません。先生方も、折に触れて指導されていると思います。そのポイントが、教科書の初めに提示されているのはよいですね。道徳科でも、「学び方を学ぶ」ことは大切なことです。最初に学び方について意識させ、日々、教師が評価して、定着させていくことが大事ですね。

杉中 今、「学び方を学ぶ」という大

切な言葉が出ました。第1教材の「道徳が始まるよ」の後、通常教材に入っていくわけですが、第2教材では、教材の下段で、「道徳の学び方」を説明しています。実際の教材に取り組みながら、どんなところに着目して読んだらよいか、自分にどのように引き付けて考えればよいかを順に説明しており、学習にスムーズに入っていける設計になっています。

中里 1年生については入門期なので、2年生以上とは異なるページ作りがなされています。第1教材の前に置かれた1年生用の「どうとくがはじまるよ」から第5教材にかけて、道徳科で何を学ぶのかや、話し合いの大切さなどを、先生が子どもたちにじっくりと伝えられるようになっています。

杉中 各学年、1年間の学習の始まりにあたって、道徳科が継続的な学びであること、そして、どんな学び方をしていくのかを、きちんと押さえられる設計になっていますね。何より、道徳科への期待感が湧き上がってくる、そんな紙面になっているのがよいですね。

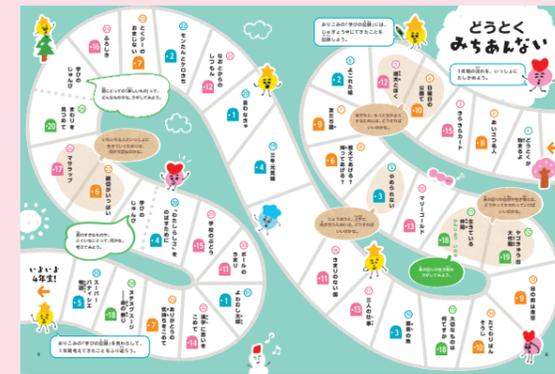
第1教材「道徳が始まるよ」(3年p.4-9)



1見開き目《道徳で学ぶ〇〇のとびら》
その学年で学習する内容項目(テーマ)を一覧できるページ。
(〇〇には、学年で学習するテーマの数が入る。)



2見開き目《みんなで気持ちよく話し合うためのこつ》
対話や話し合いの「こつ」を押さえ、「やってみよう」でそれを確かめながら、簡単な話し合い活動を行う。



3見開き目《道徳みちあんない》
1年間で学習する全教材を見渡せるページ。

第2教材「あいさつ名人」(3年p.10-13)



上段に教材、下段に「道徳の学び方」(3年生以上)を提示。

「学びの記録」

——自己評価の大切さ

杉中 学びの見通しをもつこととともに、大切なのは振り返りです。教科書の巻末には、折込で「学びの記録」(下図版)があります。このシートに、1時間1時間の学びの振り返りを記録していきます。学期末、学年末に振り返り、自分の学びを一目で見渡せるのは効果的です。まさに、「継続的な学び」を実感できるのです。

中里 「学びの記録」も、学年に応じた工夫がなされていますね。1～4年生はシール、5、6年生は一言感想を主にしています。とてもいいと思うのは、振り返りの視点がきちんと示されていることです。1～4年生は「たくさん考えた。」「よく聞いた。」「もっと〇〇したい。」という視点。5、6年生は、「自分のこととして考えることができた。」「友達のことを聞いて、自分の考えが深まった。」「もっと考えたい、やってみたいことが見つかった。」という視点が挙げられています。

杉中 振り返りに時間をかけずに、無理なくできるのがよいですね。「友達のことを聞いて、自分の考えが深まった。」という視点が入っているのは、第1教材の「道徳が始まるよ」で重視した「みんなで気持ちよく話し合うためのこつ」とリンクしていて、効果的です。

中里 子ども自身にとって、自己評価はとても大事なことです。「自分は〇〇ができています」と感じることは、自分の成長を感じ取ることにほかなりません。例えば、学期の区切りの振り返りでは、心に残っている教材は何か、その教材ではどんな学習をしたのかと教師がきいてあげる。学年末の振り返りでは、道徳科の学びを通して、1年間で成長したのはどんなところかときいてあげる。少し大きな視点から、自分自身を評価することが大事です。1年間の振り返りで「学びの記録」が完成したとき、子どもは充実感を覚えるでしょう。こんなにたくさんを1年間学んできたんだ、心も成長してい

るんだ、と。そんな振り返りの時間を、教師が意識して設定することが大事です。

杉中 教師は、ずっと同じ子どもたちにつき合うことはできません。共に学びを続けて、子どもたちがそれぞれ巣立っていくそのときまでに、自分で自分の生き方や在り方をしっかり考えることができる子にしてあげたい。子ども自身が自分の生き方をしっかり考えること、それが自己評価の本質です。教師が子どもに評価を伝えるというのも、子ども自身の心を肥やすための一つの方法です。

中里 そうですね。子どもにとって、自己評価は、自らの成長を感じ、自信をもち、そして、気持ちがいいなと思えることです。子どもが自己評価できたときに、教師はすかさず、「自分のことをよく考えられたね。」と言ってあげたいですね。そんな教師とのやり取りの中で、子どもは自己評価ができるようになっていくのだと思います。

「考えよう・話し合おう」

——対話の入り口としてのてびき

中里 ねらいとする価値を子どもたちにつかませるために、教師が教材をどう料理していくか。これは大切なことですが、経験の浅い先生にとっては大変なことです。まず大事なのは、毎時間、一定水準の授業を積み重ねていくことです。そのためには、教科書のてびきが、きちんと授業で使えるものになっていることが大切です。

杉中 光村図書のとびきは、基本的に3つの発問で構成されています。それは、次の3つの観点に基づいています。

- 1 〈道徳的な課題を捉える発問〉
主人公の道徳的な問題は何か。
- 2 〈中心的な発問〉
道徳的な課題に対して、主人公はどのような気づきをしたのか。
- 3 〈まとめの発問〉
道徳的価値を自分と結び付ける。

1時間の授業を行うには、これらの観点が不可欠です。てびきを一つの

柱にして、さまざまに授業展開を考えてほしいと思います。

中里 ねらいに迫るための基本的な発問をもとに、「揺さぶり」や「問い返し」の補助発問を入れるなど、目の前の子どもたちに適した問い方をアレンジしてほしいですね。

杉中 そうですね。てびきの発問は、子どもたちの主体的な議論の入り口です。入り口からさらに話し合っていけるように、教師が適切な二の矢、三の矢の、追発問を重ねていくことが大切です。教科書のてびきが一定水準の授業を保障するものとはいえ、教科書どおりの発問をそのまま提示すれば授業が成立するほど、道徳科の授業は甘くありません。子どもどうしの主体的な対話を、どう展開していくかは、教師が経験を積みながら試行錯誤し、作り上げてほしいところです。そして、そこが、まさに道徳科のおもしろいところでもあります。

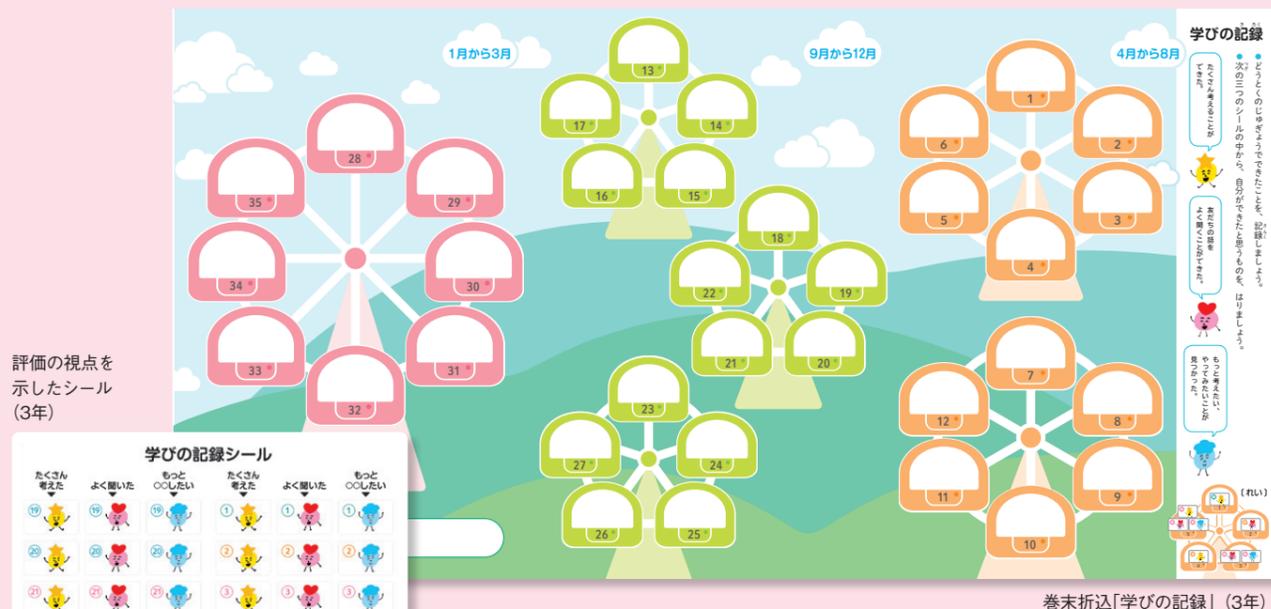
中里 新版教科書には、通常のとびきの他にも、子どもの対話や思考を

促す工夫が随所に見られます。幾つかの教材では、思考ツールや役割演技、話し合い活動の例(下図版)などが示されていますね。誤解を恐れずにいうと、道徳科の授業はマンネリ化しがちなところもあります。そんな中で、こうしたツールや活動を紹介してくれるのは、意欲的な先生にとっては、助けになると思います。

杉中 教科書に載っているそれらの活動をヒントに、新しいアイデアがひらめくかもしれませんよね。全国の先生方が新しい試みを共有していけば、道徳科の学びがますます豊かなものになると思います。

中里 子どもたちの成長に資する教科書であると同時に、教師も力をつけることができる教科書になっていますね。

杉中 全国の教室で、よりよい道徳科の時間が実現するよう、お互いががんばりましょう。

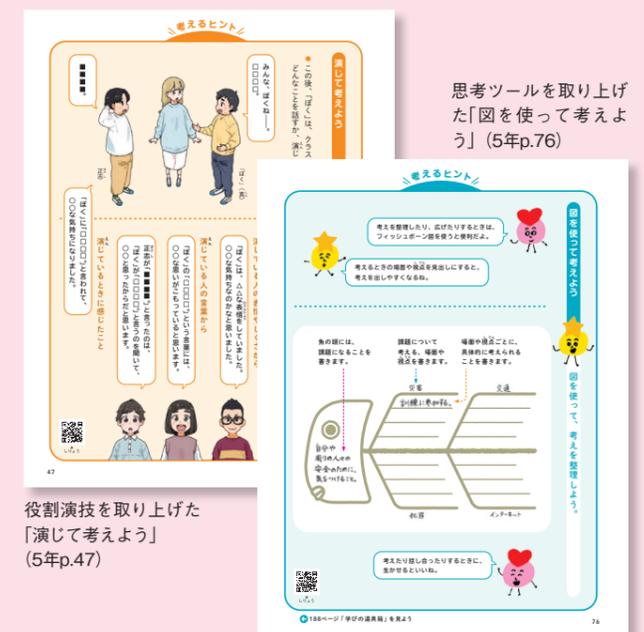


評価の視点を示したシール(3年)

巻末折込「学びの記録」(3年)



てびき「考えよう・話し合おう」(4年「29 梨の実——アンリ＝ファール」)



思考ツールを取り上げた「図を使って考えよう」(5年p.76)

役割演技を取り上げた「演じて考えよう」(5年p.47)